首都大学東京都市教養学部人文・社会系
首都大学東京人文科学研究科
「人文学報」第513-7号
(日本語教育学)
2017年3月抜刷

接触言語の分類に関する量的研究 —起点言語の割合を通して—

ダニエル・ロング 甲賀 真広

接触言語の分類に関する量的研究

一起点言語の割合を通して一

ダニエル・ロング

甲賀 真広

1. はじめに

社会言語学には量的分析と質的分析がある。例えば、ロング (1989, 1990a) で量的分析を用いて方言意識や方言変容を調べたものが。ロング (1990b) と (1998) はそれぞれ移住者の方言意識と自然災害後のうわさを質的に分析したものである。甲賀 (2016a, 2016b) はその両方を用いて、戦前の中国大陸で使われていた混合言語「協和語」の使用実態に攻めた。またロングは言語接触の分析に「類型・分類」(ロング2010, 2012) や「経道をたどる」(ロング2015) といった質的分析の手法を用いている。

本稿では日本語が起点言語 (source language) の一つとなっている複数の接触言語を取り上げて、それぞれの起点言語に由来する単語 (または形態素) を集計するという量的分析を行なう。取り上げる接触言語は小笠原の欧米島民の間で使われる小笠原混合言語、旧満洲国で使われていた協和語、19世紀後半に使われた横浜ピジン、20世紀半ばの日本や朝鮮半島で使われたバンブー英語、そして現在でも台湾で使われるクレオール日本語の5種類である。本稿の目的は、日本語が1起点言語になっているこれらの接触言語の分類を再検証することにある。つまり、それぞれは果たして (名称の通り) ピジンやクレオール、混合言語なのか、さらには名称になる言語 (上層言語とされている言語) は果たして最も多くの単語を供給している言語かどうかを検証するのである。

接触言語の種類として最もよく知られているのはピジンとクレオールであるが、この二種類以外にも数多くの種類 (あるいは下位分類) があることが指摘されている。例えば「ピジン」だけでも様々のたぐいがあり、前ピジン (prepidgin)、ジャーゴン (jargon)、限定ピジン (limited pidgin)、安定ピジン (stable pidgin)、拡張ピジン (expanded pidgin) などである。そしてクレオールとは別に準クレオール (別名クレオロイド、creoloid) があるが、実はクレオロイドと呼ばれている言語変種の中には二つのかなり異なった性格をもつものが雑然としているという指摘もある (Trudgill 2002)。そして、別の観点からの分類としてクレオール連続帯といった現象、すなわち下位言語 (basilect)、中位言語 (mesolect)、高位言語 (acrolect) といった分類がある。さらに、脱クレオール化やその結果生まれるポストクレオール (postcreole) もある。最後に同一言語内の複数の方言の接触によって形成されるコイナーがあるし、混合言語やTrudgillの言う「Dual Source Pidgin」という現象もある。

上述のような接触言語の種類を分類するには文法事項がどの程度単純化されているというこ

とや、語彙の意味領域の拡張による多義語化、話者にとって母語となっているかどうかなど、多くの要因分類が行なわれている。その一つはそれぞれの起点言語に由来する単語の多さである。

典型的なビジンの場合、語彙の8割以上は同一の(上層)言語に由来する(Sebba 1997:25)と言われている。そしてTrudgill(2002)やBakker(1994)は「混合言語」を二つの起点言語をもつものとして定義づけている。Bakkerやその関係者が記述した多くの混合言語の場合、それぞれの起点は6割4割など半々に近い割合で、2つの起点言語との間に大きいな偏りが見られないとされている。本稿では上記の5種類の接触言語の基となった起点言語はそれぞれどれぐらいの割合になっているかという点に注目し、それらの接触言語としての分類を検証する。

2. 小笠原混合言語の割合

小笠原混合言語には英語と日本語の両方が同一の文に現れる。欧米系島民3人による自然会話には3種類の文が見られる。それは(a)「日本語のみによる文」と(b)「英語のみによる文」と(c)英語と日本語が同一発話内で絡み合っている(intertwined)「混合言語の文」である。そして混合言語文の中に含まれる英語起源の要素と日本語起源の要素のそれぞれの割合を単語単位で集計した。例1はロング(2013a)に載った会話である。

例1 K: I refuse to learn the 丁寧 way. I refuse. I'm gonna stay Chichijima way. (笑)

I: Meはちゃんとしないと。

K: They laugh at me, but that's okay.

I: いいんだ。bothできれば。私はちゃんとの日本語も話せるし、この父島の日本語もやっているよ!

これは自然会話の文字起こしによる会話なので、どこからどこまでが一つの文(sentence)かという問題があるが、それは全ての言語の話し言葉において言える問題であり、小笠原混合言語特有の問題ではない。上の文字起こしでは広く使われる基準(ポーズの有無、番交代の有無、述語があるかどうかなど構造的に文=sentenceとして成立するか、など)を応用して上記のように8つの文に分けた。どの言語の文であるかという判断は次の通りである。

- (a)「日本語起源要素(のみ)による文」6, 8
- (b)「英語起源要素(のみ)による文」2, 3, 5
- (c)「混合言語の文」1, 4, 7

以下で小笠原の欧米系島民との間で行なわれた自然談話を資料として、量的分析を行なった。データを採録したのは2001年3月13日で、33分にわたる自然会話データである。話者が3人いるが、1氏は英語起源の単語が830語(47.4%)であり、日本語起源の単語は920語(52.6%)、R氏は189語を産出し、英語起源を79語(41.8%)、そして日本語起源を110語(58.2%)産出しておりこの2人は5分5分に近い数字となった。しかし、F氏を見ると1566語のうち英語起源は279語(17.8%)、日本語起源は1287語(82.2%)であった。この割合はこれまで述べてきたよう

な5割5割ではない。この定説との大差を考慮し、人物名、地名などの固有名詞1語だけが英語起源要素として含まれている混合言語を日本語のみで構成されたとみなし、それらを省いて集計した(表1)。そうすることで各起点言語の割合に変化が生じることを期待したが、結果としておよそ1%の変化しか起こらなかった。したがってこのF氏の要因はほかにあると考えられる。3人の話者は小笠原の米軍統治時代に生まれ育った者であるが、I氏とR氏は二人共成人アメリカに渡って数十年暮らしていたのに比べ、F氏はナイチ(日本本土)に数年間住んでいた以外はずっと小笠原諸島で暮らしておりアメリカに住んだことがない。F氏が話す混合言語に含まれる日本語起源要素の割合が高い実態はこうした居住経験と関係していると思われる。しかし、もしそうであればアメリカの生活が長かったI氏とR氏はどうしてより英語に染まっているかという疑問がわきあがる。居住歴の影響を考えるために、別の話者のデータを見ることにした。

表1 小笠原の混合言語文に見られる起点言語(日本語と英語)の割合、その1

延べ数	日本語起源要素		英語起源要素		総数
I	905語	52.2%	826語	47.7%	1731語
R	110語	58.2%	79語	41.8%	189語
F	1126語	81.1%	263語	18.9%	1389語
総数	2141語	64.7%	1168語	35.3%	3309語

以下で見るデータは表1で見たI氏と他の二人の話者との会話である。R氏とF氏と同様、小笠原米軍時代に生まれ育った欧米系島民である。データを採録したのは2004年5月4日で、90分にわたる会話である。会話全体には466文が含まれていたが、その内訳をみると日本語起源要素のみによる文は147(31.5%)、英語起源要素のみによる文は132(28.3%)、混合言語は187(40.1%)であった。

次に(a)日本語のみの文と(b)英語のみの文を省いて、(c)混合言語の47文だけに注目し、文の中に含まれている英語起源の要素と日本語起源の要素のそれぞれの割合を算出した(表2)。その結果、話者間の差異が見られて、E氏の混合言語の13文に含まれる343単語は英単語が275語(80.2%)で、日本語は68語(19.8%)であった。I氏の混合言語に含まれる359単語の内訳は英語109(30.4%)に対して日本語250(69.6%)であった。M氏の208語には英語81(38.9%)に対して日本語127(61.1%)であった。話者による違いが見られたものの、混合言語はビジョンのように極端に一つの言語に偏りがなく、両方の起点言語に由来する単語が使われていることが分かった。3人の47文を合わせて合計(445語)をみると、英語起源は465単語(51.1%)で、日本語起源は445単語(48.9%)で、差が2.2%しかない結果となった。

さらに、同じ会話の異なり語数を集計した結果、I氏に見られた述べ語数359単語の内、216語が異なり語として認められ、英語88(40.7%)の異なり語に対して、日本語は128(59.3%)の異なり語であった。また、M氏は208語の延べ語に対し、英語59(46.1%)、日本語69(53.9%)の異なり語であった。一方E氏の343語には英語156(77.6%)に対して日本語45(22.4%)であっ

た。3人の異なり語をまとめると、545の異なり語で構成され、そのうち英語起源のものは303 (55.6%)、日本語起源のものは242 (44.4%)であった。

英語の割合が高いE氏のような話者もいれば、日本語の割合の高いI氏とM氏のような話者もいる。ただし興味深いことは、話者は三人とも数十年にわたりアメリカで暮らしているにも係らず、使用している混合言語は英語と日本語半々である。混合言語はビジンと違って、2つの言語がほぼ半々の割合で絡み合っているとされているが、小笠原混合はまさに英語起源要素と日本語起源要素は5割5割であることがわかった。

表2 小笠原の混合言語文に見られる起点言語（日本語と英語）の割合その1

延べ数	日本語起源要素		英語起源要素		総数
I 22文	250語	69.6%	109語	30.4%	359語
M 12文	127語	61.1%	81語	38.9%	208語
E 13文	68語	19.8%	275語	80.2%	343語
合計 47文	445語	48.9%	465語	51.1%	910語
異なり数	日本語起源要素		英語起源要素		総数
I	128語	59.3%	88語	40.7%	216語
M	69語	53.9%	59語	46.1%	128語
E	45語	22.4%	156語	77.6%	201語
総数	242語	44.4%	303語	55.6%	545語

3. 旧満洲国の協和語の割合

甲賀2016bでは、旧満洲国で使われた接触言語「協和語」の文字資料（絵葉書）を分析し、混合型の発話の中にある日本語と中国語のそれぞれの形態素の割合を調べた。ここで取り扱っている文字資料は戦時中の満洲での暮らしを内地（日本国内）に伝えるためのプロパガンダ的な性格をもつカラー印刷した漫画風の絵葉書である。106枚の絵葉書に出てくる280の文を、例2のように中国語起源要素のみによる文と日本語起源要素のみによる文、および混合型文の3種類にわけた。

- 例2 現地人：タイジンナールチユイ（お客さん何処まで行くんですか）（中国語文）
 日本兵1：クワイクワイデー（早くはやく）走つてくれ後に負けるなよ（混合型）
 日本兵2：愉快々々（日本語文）
 日本兵3：前を超越せばライヤンモーチエン（二十銭）奮發するぞ（混合型）
 日本兵4：あまり気ばるなよチアーオ（足）が痛いよ（混合型）

さて、280文のうち、中国語文は37文（13.2%）、日本語文は191（69.3%）文であったが、混合型と判断した49文（17.5%）を集計した結果、述べ語数では日本語の形態素は72.8%（268形態素）で、中国語の形態素は27.2%（100形態素）だとしている。本稿ではさらに異なり語数を

調べ、日本語の形態素は137形態素の66.8%、中国語の形態素は68形態素の33.2%だと分かった。どちらの観点でも日本語の形態素と中国語の形態素の割合は7対3となった。広い意味の協和語には確かに非文に当たるビジン化された中国語の発話も、非文に当たるビジン化された日本語も見られるが、この数字を見る限りにおいて、協和語は典型的な「9対1」ビジンではないという結論に至っている。

表3 文字資料における協和語の数量的分析

形態素	日本語起源要素		中国語起源要素		総数
	延べ	割合	延べ	割合	
延べ	268形態素	72.8%	100形態素	27.2%	368形態素
異なり	137形態素	66.8%	68形態素	33.2%	205形態素

4. 19世紀の横浜ビジン日本語の割合

19世紀後半の横浜やなど日本の開港場で日本人と西洋人と華僑との間で接触言語が使われていた。カイザー（2005）は分析した結果それはビジン日本語に当たると判断しているが、筆者はその判定が妥当であると思っている。そのビジンを教科書風に解説する冊子も刊行されたのである。大橋・ロング（2011）で解説しているように基層言語に当たる英語や中国語の意味範疇や文法事項、語順における影響が見られるが、上層言語は日本語であるので、日本語起源の単語が大部分を占めている。

例3 Watarkoosh' nang eye chapeau arimasu.

私 長い chapeau あります

私の高い帽子がありますか。

例4 House arimasen, skoshee high kin maro maro arimasu.

Houseありません少し 拝見 回る回る あります

私の住まいはここではない。私は少し見て回っているのです。

例5 Mar chobber chobber shinjoe

馬chobber chobber 進上

馬に餌を与えなさい。

例6 Watarkoosh' tempo high kin nigh nang eye tokey

私 天保 拝見 ない 長い 時

長い間天保（古い硬貨）を見ていない。

表4 19世紀横浜ビジン日本語の起点言語の割合

	日本語起源要素		英語起源要素		マレー語起源要素		仏語など	総数
	延べ	割合	延べ	割合	延べ	割合		
延べ	798語	87.5%	66語	7.2%	38語	4.2%	10語	912語
異なり	206語	85.4%	26語	10.8%	5語	2.1%	4語	241語

5. 20世紀のバンブー英語の割合

第2次世界大戦後の日本や朝鮮半島において、「バンブー英語」(bamboo English) と呼ばれる米軍と現地人との間に接触言語がある。バンブー英語の資料は極めて少ない。数本の論文で例文を挙げているもの (Goodman 1967, Norman 1955, Algeo 1960) とシンデレラ物語をバンブー英語風に語っているテキスト (Webster 1960) だけである。そのわずかなデータを数量的に見ると次の通りである。その全てに入っている単語をデータベース化したら異なり語数が124語となった。これらは単語リストや短い例文の形となっているので、延べ語数を数えるのに適していないデータであるが、シンデレラ物語はテキストの形となっている。ここでテキストを数量的に分析する。

まず、延べ語数を数えたところ424語になっている。述べ語数を集計する意義は例えば「その接触言語を使った会話を聞いたならそれぞれの起点言語の割合はどれぐらい聞けるか」という質問に答えることができる点にある。英語は352語 (83.0%、なおこの内23語はビジン英語)、日本語は67語 (15.8%)、韓国語5語 (1.2%) である。

次に異なり語数をみよう。異なり語数を集計する意義は例えば「その接触言語の辞書を作ったら、それぞれの起点言語の割合はどれぐらいになるか」という質問に答えられる点にある。異なり語数は198語で、英語起源の単語は179語 (90.4%)。なお179語のうちの11語はketchee (手にする) や chop-chop (食べ物) のようなビジン英語に近い表現である。日本語起源が14語 (7.0%)、韓国語起源は5語 (2.5%) である (表5)。

以上のことを考えると、バンブー英語を聞いたり文字になっているのを見たりすると日本語の部分 (15.8%) がやや多い印象を受けるが、それは延べ数の割合である。よく観察すると taksan, skoshi, sayonara, -san (沢山, 少し, さよなら, ~さん) など同じ日本語が繰り返し使われているのである。異なり数を考えるとき、日本語の割合が15.8%からその約半分当たる7.0%に減ることからそのことが分かる。ビジンの約9割の語彙が上層言語に由来すると言われているが、語彙面から考えるとバンブー英語は典型的なビジンに近いと言える。

表5 バンブー英語の起点言語の割合

	英語起源要素		日本語起源要素		韓国語起源要素		総数
延べ数	352語	83.0%	67語	15.8%	5語	1.2%	424語
異なり数	179語	90.4%	14語	7.0%	5語	2.5%	198語

なお、この数字はあまり厳密にこだわってはいけない。なぜなら、英語か日本語かは簡単に数えられるようで、こうした接触言語の場合は実は難しい。例えば、number one outfit (一番の服), number one prince (王子様), number one jo-san (お嬢さん), number one fit (number one princess (お姫様) のように日本語の「一番」が直訳されている表現が多く見られる。この単語の「形」は英語であっても、こうした英語は一般に使われるものではないので、むしろ英語よりも日本語に近いと判断したほうが妥当である。同様、beeru (ビール) は日本

語と判断して良さそう。葉舟のことをpost cardoと表現している。このcardo以外にwashee-washee（洗濯）やchange（変わる）など日本語訛の英語を表していると思われるつづりがいくつも見受けられる。しかし、考えてみれば、日本語で「ポストカード」は一般に言わない。やはり「はがき」である。今回はpostはpostoになっていないことから英語に教え、cardoを日本語に教えたが、確かに際どいところである。

6. 台湾クレオール日本語の割合

真田・簡（2008）は台湾クレオールについて言及している。このクレオールは、「日本語と台湾のアタヤルとの接触で生まれた日本語クレオール」であり、「台湾東部の宜蘭県大同郷と南澳郷に住む一部のアタヤル人（のすべての世代）によって用いられている」ものである。このクレオールにおける上層言語は日本語、基層言語はアタヤル、セディック語である。量的分析に移る前にここで例を出しておきたい。

例7 wahataci isyo bang mami tabe te benah miyeru.

私 たち 一 緒 晩 飯 食 べ て 星 見 える
私たちが一緒に晩ご飯を食べて星を見る。

例8 waha no mama kawa lukus ara teru.

私 の 母 川 服 洗 てる
母が川へ洗濯に行っている／川で洗濯している。

例9 waha to koko ngasal cisal teru.

私 と 兄 家 遊 てる。
私と兄は家で遊んでいる。

これらの例文を見てもわかるように、日本語を起源とする語が多くある。このことについて真田（2010）やChien（2015：516-7）は、基礎語彙は日本語を起源とするものがおよそ79%、アタヤル語を起源とするものは約21%であると述べている。したがって割合だけをみれば、典型的なビジンや混合言語と両方と少し異なると言える。

表6 台湾クレオール日本語の起点言語の割合

	日本語起源要素	アタヤル語起源要素
異なり数	79%	21%

7. 考察

以上で取り上げた接触言語の起点言語の割合について考察するために、表7のように比較しやすいようにまとめる。

バンブー英語はビジンであり、起点言語（source language）は英語と日本語と韓国語である。英語が上層言語（superstrate language）であるため、ビジン日本語ではなく、ビジン英語と呼ばれている。日本語と韓国語はそれぞれ基層言語（substrate languages）である。

台湾クレオールは元々その使用地域で発生したビジン化された日本語から発達したと思われる。ビジンの段階では日本語の割合が（典型的なビジンのように）9割近くだったかどうか分からないが、クレオールとなって使われている現在、ビジン段階で基層言語の一つであったと思われるアタヤル語から沢山の単語（3割）が入っていることが分かっている。言語接触論では上層言語と基層言語以外にも adstrate language（傍層言語）と呼ばれる言語もある。adstrateとは、取り入れられる語彙の元となった言語の名称である。もしアタヤル語の割合がクレオールとなった後に増えたとすれば、（クレオール）日本語の中にアタヤル語が導入されたということの意味し、アタヤル語は adstrate とも呼べる。

小笠原の接触言語はやはり混合言語であり、ビジンのように複数の起点言語の役割が上層言語と基層言語に区別できるわけではない。使用者の個人差が見られるものの、英語と日本語のそれぞれに由来する単語には極端な差異が見られないのが特徴と言える。小笠原欧米系島民によると「特に小笠原っぽいしゃべり方をしている」と評価されている3人の会話を延べ数から見ても、異なり数から見ても英語と日本語のそれぞれの割合は半々に近いことが分かった。なお、小笠原の欧米系のことばは典型的な混合と同様、両方の起点言語に由来する言語事象には文法事項の単純化はほとんど見られず、2つの言語は（ほぼ）ありのままに入り混じっているのである。

興味深いのは、甲賀2016aで論じているように、協和語は（文法構造からすると確かビジン化のような単純化が見られるものの）語彙面から見ると延べ数にしても異なり数にしても7割3割に近いことが分かったことである。すなわち、ビジン化と呼べる文法的単純化が両方の起点言語に見られるものの、語彙量の割合から「この言語が上層言語、あの言語が基層言語」と言えるような状況になっていない。起点言語の割合からするとむしろ9割1割になりがちなビジンと5割5割になりがちな混合言語との中間にある接触言語である。いずれにせよ、「協和語」は「ビジン日本語かビジン中国語か」という議論は難しい。言うならば協和語は「ビジン化された日本語とビジン化された中国語の混合言語」という見方が有益かもしれない。

表7 それぞれの接触言語における起点言語の割合の比較

接触言語	日本語	他の言語	接触言語の分類。起点言語。
小笠原混合言語（延べ）	48.9%	51.1%	混合言語。起点言語の英語と日本語は
小笠原混合言語（異なり）	44.4%	55.6%	上層言語・基層言語の関係ではない
旧満洲国協和語（延べ）	72.8%	27.2%	混合言語とビジンの両方の特徴が見られる
旧満洲国協和語（異なり）	66.8%	33.2%	
横浜ビジン日本語（延べ）	87.5%	7.2%	ビジン日本語。上層言語＝日本語、基層言語＝英語、中国語
横浜ビジン日本語（異なり）	85.4%	10.8%	
バンブー英語（延べ）	15.8%	83.0%	ビジン英語。上層言語＝英語、基層言語＝日本語、韓国語
バンブー英語（異なり）	7.0%	90.4%	
台湾クレオール（異なり）	79.0%	21.0%	クレオール日本語。上層言語＝日本語、基層言語＝アタヤル語、セディック語

以上で日本語が起点言語の一つになっていた5つの接触言語（小笠原混合言語、旧満洲国の協和語、19世紀横浜ビジン日本語、バンブー英語、台湾クレオール日本語）を取り上げて、それぞれの起点言語の割合だけについて考察し、どのような接触言語であるか分類することを試みた。もちろん類型のためにはこのような語彙の起源だけではなく、語彙の意味領域が広がっているかどうか（多義語化）、あるいは文法がどの程度単純化されているかなどの総合的判定が必要であるが、本稿ではその一つの課題として供給語彙の割合に注目した。

付記

本研究はJSPS科研費基盤研究（B）15H05158「太平洋諸語日本語起源借用語逆引き辞典を作成するための現地調査研究」（研究代表者ダニエル・ロング）の助成を受けて行なわれたものである。

参考文献

- 大橋理枝、ダニエル・ロング（2011）『日本語からたどる文化』放送大学
- カイザー、シュテファン（2005）『Exercises in the Yokohama Dialectと横浜ダイアレクト』『日本語の研究』1-1：35-50
- 甲賀真広（2016a）『日本語普及政策のオーラルヒストリー—旧満洲国在住者の聞き取り調査から—』『インドネシア日本語教育学会予稿集』全4頁
- 甲賀真広（2016b）『協和語の環境に育った人の記憶をたどる—旧満洲国の日本人住民のオーラルヒストリーから読み取る言語接触史—』『日本語学会秋季大会予稿集』25-32
- 板井隆（2015）『戦時下のビジン中国語—「協和語」「兵隊支那語」など—』三元社
- 真田信治（2010）『台湾の「宜蘭クレオール」—日本語に触れ独自に発達—』『産経新聞』平成22年8月21日夕刊
- 真田信治・簡月真（2008）『台湾における日本語クレオールについて』『日本語の研究』4-2：69-76
- 張守祥（2012）『満洲国地域における言語接触—写真資料からみる日本語普及史—』首都大学東京博士論文
- ロング、ダニエル（1989）『京阪方言に対する他地方出身者の意識と方言使用』『待兼山論叢』23：41-59 大阪大学文学会
- ロング、ダニエル（1990a）『大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容の違い』『国語学』162：76-89
- ロング、ダニエル（1990b）『方言接触による方言意識と行動』『地域言語』2：3-12
- ロング、ダニエル（1998）『外国人とうわさ—緊急時の場合に注目して—』『日本語学』17.1：23-34（1999『現代のエスプリ』別冊『流言、うわさ、そして情報』157-169再掲載）
- ロング、ダニエル（1999）『地域言語としてのビジン・ジャパニーズ 文献に見られる19世紀開港場の接触言語』『地域言語』11：1-10 pdf：nihongo.hum.tmu.ac.jp/~long

- ロング、ダニエル (2008)「戦後のブローケンジャパニーズを自然習得の観点から再検討する」『日本語教育学世界大会2008 (ICJLE)』予稿集2 : 443-446 pdf : nihongo.hum.tmu.ac.jp/~long
- ロング、ダニエル (2010)「言語接触から見たウチナーヤマトウグチの分類」『人文学報』428 : 1-30
- ロング、ダニエル (2012)「小笠原混合言語は本当に「言語」なのか - 5つの側面からの検証 -」『日本語文化研究会論集』8 : 29-37
- ロング、ダニエル (2013a)「小笠原語」『日本語の隣人たちⅡ』152-163 白水社
- ロング、ダニエル (2013b)「言語接触と言語混交(第9章)」『多言語社会日本 - その現状と課題』 : 133-145 三元社
- ロング、ダニエル (2014)「言語混交 (ビジン、クレオール)」『世界民族百科事典』182-183丸善出版
- ロング、ダニエル (2015)「多言語接触の歴史社会言語学 - 小笠原諸島の場合」『歴史社会言語学入門 : 社会から読み解くことばの移り変わり』134-155 大修館
- Algeo, John T. (1960) Korean Bamboo English. *American Speech* 35 : 117-123.
- Bakker, Peter (1994) *Mixed Languages*. Amsterdam : Institute for Functional Research into Language and Language Use (IFOTT)
- Chien, Yuehchen (2015) The lexical system of Yilan Creole. In *New Advances in Formosan Linguistics*. Asia-Pacific Linguistics, ed. Elizabeth Zeitoun, Stacy F. Teng, Joy J. Wu. 513-532. Canberra : Australia National University.
- Goodman, J. S. (1967) The Development of a Dialect of English-Japanese Pidgin. *Anthropological Linguistics* 9.6 : 43-55
- Norman, Arthur (1954) Linguistic Aspects of the Mores of U.S. Occupation and Security Forces in Japan. *American Speech* 29 : 301-302.
- Norman, Arthur (1955) Bamboo English : the Japanese influence upon American speech in Japan. *American Speech* 30.1 : 44-48.
- Sebba, Mark (1997) *Contact Languages*. New York : St. Martin's Press.
- Trudgill, Peter (2002) "Dual Source Pidgins and Reverse Creoloids". *Sociolinguistic Variation and Change*. Georgetown University Press.
- Webster, Grant. (1960) Korean Bamboo English Once More. *American Speech* 35 : 261-265.